

アワビ稚貝の放流効果が上向いたのはなぜ？

鳥取県漁業協同組合 本所 漁政指導課 古田 晋平

第28時限目となる今回は、鳥取県内において行われたアワビ稚貝の放流効果について、鳥取県漁業協同組合の古田氏にご執筆頂きました。

我が国に栽培漁業が芽生えて早や50年以上が経過しました。この間に多くの種類の魚介類の種苗生産と放流が手がけられてきましたが、ごく初期より全国的に取り組み、未だに大量放流が続いている人気対象種に「アワビ」があります。北方種のエゾアワビと南方種のクロアワビを主体に、メガイやマダカなどを加えると、毎年1,500万個ほどの稚貝が放流されているのですから、各地での力の入れようも推して知るべしです。

ところが、このように莫大な数の稚貝が放流されているにもかかわらず、このところ、全国のアワビ類の漁獲量は減少傾向に歯止めがかかりません。その原因として、近年の温暖化傾向による餌の海藻類の減少を始めとする海況の変化や横行する密漁などが各地の研究者によって唱えられていますが、真実はいかなのでしょ

う。ところで、鳥取県でも栽培漁業センターが設立された1981年以降、津々浦々でのクロアワビの放流が漁師さん達によって続けられてきました。当初は全国の例に違わず漁獲量が伸び悩み、放流効果への疑念も耳にするようになっていました。ところが、2000年代に入った頃より、全国の^{すうせい}趨勢に反して急激な増加に転じ、それまでの2倍以上の漁獲量を得ることができるようになったのです。いったい何が他県と違っていたのでしょ

う。稚貝放流が定例化するにつれ、栽培漁業協会から購入した稚貝を各地区の担当者達が地先にばら撒く習慣が広まっていたのですが、そこに「ちょっと待った！」をかけたのが丁度2000年のことでした。実は、小さなアワビ稚貝にも結構気むずかしいところがあり、気に入らない場所に放流されるとパニック状態のような長距離の逃避行動をとり、その過程でタコやカニ類に出くわしては捉えられて死んでいくことが分かってきました。サバイバルな海の中では、放流直後の移動は死を意味するのです。さらに、稚貝が落ち着く間隙の形状なども見えてきたことから、稚貝を生産する栽培漁業協会の職員が全ての放流現場に出向き、潜水で1個1個を適所に差し込む方法を手ほどきしてきたのでした。さらに、全国的に藻場が減少する中、比較的高水温に強いアラメの種苗移植活動にも取り組み、各地に広がった藻場が餌の供給源になったことも功を奏したことでしょ

う。今では、鳥取県の漁師さんが漁獲するアワビの半数以上が放流貝のようですが、これからもこの効果が続くよう、放流方法を徹底するとともに、海況の変化に対応した藻場の確保に取り組むことが求められます。



アワビ稚貝を1個1個丁寧に間隙に差し込む
鳥取県の潜水漁業者

